
原 著

体育哲学における〈思想研究〉のあり方に向けた一視点：心身関係論に着眼して

A study of thought as part of physical education philosophy :
From the viewpoint of the mind-body problem

林 洋 輔*, 井 上 誠 治**

Yosuke HAYASHI* and Seiji INOUE**

ABSTRACT

The present work attempted to clarify a methodological presupposition in the context of physical education philosophy, with discussion centering mainly on the philosophy of René Descartes (1596-1650). In the field of physical education philosophy, many mistakes have been made when critiquing philosophers' thoughts on the mind-body problem. However, mistakes might have been avoided if a methodological presupposition had prevailed. Accordingly, examining the presupposition from the perspective of the mind-body theory of Descartes should prove informative.

Thus far, the mind-body problem described by Descartes has been heavily critiqued, and authors often criticized him based on their experimental knowledge. As a result, critical perspectives based on philology have not been adopted, and most critiques would be contradicted by reading Descartes' *Meditations on First Philosophy*. Descartes' mind-body theory presupposes the existence of God, and this aspect needs to be examined. In *The Passions of the Soul*, he regards the soul as really joined to the whole body, which is quite distinct from what is known as Dualism. In conclusion, a philosopher's thoughts must be analyzed systematically. The present work also offers the opportunity to explore the theological background of physical education philosophy and intensively research *The Passions of the Soul*.

Key words; René Descartes, mind-body problem, The Passions of the Soul

本研究では、デカルト哲学を研究対象とすることにより、体育哲学の思想研究における方法論的な前提が明らかとなる。体育哲学分野の心身関係論において、思想研究における過ちがくりかえし

行われた。しかし或る方法論的な前提が徹底されているならば、それらの批判は回避しえたはずである。そこでデカルトの心身関係論という視座から当該の前提を考えてみるのも有益であろう。

* 国士舘大学体育学部附属体育研究所 (Institute of health, physical education and sport science school of physical education Kokushikan University)

** 国士舘大学体育学部 (Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

これまで多くの批判がデカルトにおける心身問題に対して寄せられてきたものの、諸研究者はしばしば経験的な実践知に頼りつつ議論を展開した。その結果、一方で文献学にもとづく批判的検討の視座は失われると同時に、デカルトの「第一省察」を検討することによって、これまでに見受けられた批判の多くは反駁されうるものである。他方、デカルトの心身関係論は神の存在を前提とするものであり、この知見について吟味する必要がある。さらに『情念論』において、デカルトは精神を「真に身体全体と結合したもの」と見なしており、いわゆる「心身二元論」とは異なる見地に立つ。結論的には、任意の哲学者の思想を研究するならば、その哲学者の思想を体系的な見地から考察することが必要である。当該の議論は体育哲学における神学的な背景を探究することへと道を拓くものであり、また『情念論』に対する精密な検討にもつながるものである。

I. は じ め に

周知のように、身体教育（体育）の原理論的な問いを検討する体育哲学（原理）分野の心身論においては^{注1)}、往昔からルネ・デカルト（René Descartes 1596-1650）の主張を批判的に検討することによって研究史が蓄積されてきた。また、この体育の心身論については従来の諸研究者が陥った論理的な誤謬についても既に指摘されており^{注2)}、当該の指摘をふまえた考察が向後の議論には求められている。ところで、いま言及した諸論者による論理的な不整合に対する批判とは別に、思想研究の遂行における或る前提が欠落したことによっても議論の誤謬が重ねられた。言い方を変え、デカルトに対してのみならず、任意の哲学者の思想を研究することにおいて求められる方法論的な前提が体育原理のデカルト批判においては欠落しており、この結果として体育の心身論では実りある議論がなし得なかったものと考えられる。この指摘および昨今の体育哲学分野において思想研究の

漸増する事実をふまえるならば^{注3)}、体育の心身論をいわば事例として思想研究における方法論的前提を確認しておくことは、斯界における今後の研究史的発展という観点から見ても有益であろう。本研究では以上の背景を受け、次の問題を設定する。すなわち、体育の心身関係論においては、いかなる方法論的な前提がとりわけデカルト批判において欠落していたのか。別の言い方をすると、従来の体育原理分野においてデカルトを批判した諸研究者が見過ごしてきた方法論にかかわる前提とは何であるのか。この問いに対する回答の提出を本研究の目的とする。

着眼点としては、まず体育における心身関係論の代表的な論者の見解を瞥見し、いわゆる〈心身二元論〉の祖とみなされたデカルトがいかに批判されたかについて検討を行う。次に、デカルトの心身論がどのような思想的基盤の上に立ち、彼に対する批判がいかなる前提を以て論じられねばならないのかについて明らかにする。さらに、当該の前提をふまえるならば、向後の体育哲学分野におけるデカルト心身論の語り方はどのようなものになるのかという問いについて回答を提出する^{注4)}。

II. 体育原理の〈二元論〉批判

これまで〈心身二元論〉と呼ばれてきた心身観は、体育原理分野の研究史のはじめから退けられたわけではない。というのも、20世紀初頭の文献においては、次の記述が見受けられるからである。

然りと雖も余は心身の関係を科学的に説述せんには、常識的の二元論の立場を取ることを、最も安全なりと信ず。（…）科学としての心理学および生理学を修めんとする者は、ただ両者の相関する確実なる現象を捉へて、これが研究を試みる可きのみ^{注5)}。

著者である高島はこの著作において、二元論的な心身観を認める立場を打ち出している。なるほ

ど彼はこの文脈で心身の関係を主観的に論じているわけではない。むしろ彼の当該テキストにおける主な関心は「身体健康」のあり方を考察することであり、彼によれば、それは心的な諸要素に影響を受けるものであるとする^{注6)}。そしてこの際に問題とされる心身の関係する有り様について、彼は「常識的二元論」の採用を主張するのである。上記の高島による記述から、後に批判の集中する〈二元論〉的な見解は、必ずしも当初から否定されるべき対象とは見なされていなかったことを確認できるだろう。

ところが、後年の議論においては、この〈二元論〉を退ける議論が多々見受けられることとなる。たとえば、次の議論はその一例とすることができる。

(…)
 けれども二元論は真理ではない。なぜならば、精神とは何を意味するかと言うに畢竟するに内的知覚（内省）によって知らるる意識現象に外ならぬ。別に精神という実体があるのではない。従って其の機能として感覚し思考するのでもない。ただこれらの心的作用を総括して、精神という名称を付して居るだけである（括弧内原文）^{注7)}。

当該の議論では、「思うもの *res cogitans*」として、言うならば実体 *substantia* としての精神を認めるデカルトの見解——『省察 *Meditationes de prima philosophia*』において確認できるような——が退けられている。上記の引用が見受けられる文脈においてはまた、〈二元論〉の退けられる理由として、心身の相関についての合理的説明がなしえないことが挙げられている^{注8)}。そして「精神的一元論、並にこれに基ける心身並行説」を「必然到達せねばならぬ最終の帰結」とし、「生活現象並に物心関係問題研究者の当然安住すべき最後の殿堂」と結論づける^{注9)}。当該の議論がその一例であるように、心身の〈二元論〉を否定する主張は体育の原理論における研究史を追うごとに漸次形成されてくるものである。なるほど当時の

自然科学者のうちには、たとえば「全機性 *Ganzbezogenheit*」という考え方から〈生命〉概念を検討した橋田邦彦のように^{注10)}、デカルトの主張した見解はおおむね退けられる傾向にあったといえる。しかしながら、デカルトをいわゆる心身二元論の創始者として捉え——もっとも、彼のテキストを精密に読解してみるならば、当該の主張は困難であろうが——、彼に対する批判が数多く見られるのは、むしろ以下に述べるように、20世紀の中盤以降においてであると言えるだろう。そしてそのうちの多くは、〈心身二元論〉を唱えた哲学者として彼をみなすところから生まれたものである。その議論の詳細を、次に見てみることにしよう。

大学体育が制度的に確固たる基盤を形成する時期において、体育学に所属する研究者のなかにも、体育の場における人間の心身関係をどのように解するかという問いへの回答が顕著にあらわれる。そして、その多くはデカルトの見解を根本的に退ける議論と見なすことができる。たとえば松井らによれば、「心身を二元的にみ、その間に因果関係を認めようとする考えを心身相制説とよんでいるが、これには、さまざまな矛盾がふくまれている」とする^{注11)}。彼らによれば、「原因、結果の関係をたもつことができるものは、つねに同一性質のものでなければならない」とし^{注12)}、いわゆる〈心身二元論〉の議論にもとづくならば、人間の心身関係についての適切な理解を得ることはできないと主張する。また彼らは自らの最後の主張として、「心身は、元来異なる二つの実体ではなく、一つの全一体であり、それを一面からみれば精神的過程としてあらわれ、他面からみれば、身体的存在としてあらわれる」とする見解を打ち出している^{注13)}。この議論は、先に本研究が指摘した諸論者の見解と同じく、心身をひとつのもののうちの二つの異なった側面であると見なす立場を採る。この一例のように、体育における心身論の議論が活性化する戦後期においても、心身を一つのものとして見なす〈一元論〉的な心身観は、体育原

理の研究者から数多く打ち出されている。それらの見解とは、たとえば「人間は本来心身一体のものであり、精神と身体は別個の実体と考えられるものではないこと」といった主張であり^{注14)}、また「元より人格の本質は(…)勿論精神にあるが、『身心一体』とか『物心一如』という言葉で表される様に、心の在り方は身の在り方であり、身の在り方は心の在り方である」という主張である^{注15)}。これらの議論はそれぞれにおいて見解に微妙な差異が見られるものの、デカルトが主張した心身論を退ける意図のあること、および心身を互に異なる実体と認めない観点において共通していると考えてよい。端的に言えば、一元論的な心身観のもとでデカルトの議論を退け、当該の心身観に立脚しながら論理を展開することがこれまで体育原理の諸研究者にしばしば見られる傾向であったと言えよう。

ただし、これまで確認してきた論者らの主張する心身関係論については、すでに充足的な検討および論駁がなされており^{注16)}、当該の諸説をそのまま受容することの不可能であるのは周知の事実であろう。その批判および論駁の要諦を言えば、これらの学説に対しては、おもにそれらの論理的な整合性に問題のあることが指摘されてきた。具体的には、従来の体育原理における心身論によっては、人間に対する身体教育の必要性を否定する帰結へ導かれるとの指摘がなされており、当該の指摘は現今の諸研究者においてすでに共有されている。他方、従来の体育原理の研究者はデカルトをひとまず心身二元論の祖であると断定し、デカルトの主張の一部を自らの都合に合わせて批判してきたにすぎないといえる。別の側面から言い直せば、これまでの諸論者はデカルトの心身論がどのような思想的基盤を前提に語られているのかという問いへの考察が及んでいないと考えられる。さらに、デカルトを批判した体育原理研究者の多くは、日常的な体育実践のうちに心身の本来的な有り様の論拠を求めているように思われる。すなわち、人間の有する諸感覚を無条件的に信頼した

うえで事物判断を下していると考えられる。しかしながらこのような見解は、デカルトの『省察』『第一省察』における議論によって反駁されうるものであり、むしろデカルト批判において彼のテキストを精密に読解することの必要性を浮き彫りにするものである。そこで次項では、デカルト哲学の心身論を根底で支える思想を指摘すると同時に、人間の有する諸感覚にもとづく判断が必ずしも妥当性を有し得ないことに着目し、議論を進めていく。

Ⅲ.「創造説」と感覚批判

体育原理の心身関係論において、デカルトの見解が〈心身二元論〉という言葉に伴って批判される際、少なくとも本項で考察する二つの論点が見過ごされてきたように思われる。第一に、デカルトの心身論を存立させるものとしての神の位置づけを等閑視してきたことを指摘できる。第二に、自らの感覚にもとづいて判断を行うことの妥当性を問う議論が欠如していることも挙げられよう。これらの各々については、以下のように考察することができる。

デカルトは1630年4月の書簡において、数学的真理——たとえば $1 + 1 = 2$ であるといったような——をも神が主意的に定めたとする独自の主張を展開する^{注17)}。彼の形而上学および自然哲学の基礎づけとなるこの「永遠真理創造説（以下「創造説」と略す）」と研究者間に呼ばれる主張について、彼は次のように表明する。

永遠であると称される数学的真理 *vérités mathématiques* は、他のすべての被造物と同様に、神によって確立されたもの *été établies de Dieu* であり、神に全面的に依存している、ということです。(…) あたかも王が自分の王国に法を確立するように、自然の中にこれらの法を確立したのは神であることを、どうかいたる所で断言し、公言なさるのを怖れませぬよう^{注18)}。

この言明はデカルトにおける形而上学のいわば根幹部分に位置づくものであり、デカルトの心身論の成立もこの命題を基礎とする。すなわち、従来は神の力によってさえも揺るがされないとされた数学に関する諸真理もまた、神による任意の決定によって創られたとデカルトは述べる^{注19)}。例えば、矛盾律などの基本的な論理法則についても、その妥当性は神がそのようにすると定めたがゆえに真理となる。端的に言えば、神の自由な意志による真理の決定という思想がデカルト形而上学の根本にあり、デカルトにおける心身関係論を語るにはこの思想的な基盤の存在に自覚的である必要がある。

ところで、この「創造説」がデカルトの心身関係論をどのように基礎づけているのだろうか。この問いに対する結論から先に述べておくと、「創造説」の表明から来る帰結として、次のような自然観が据えられる。すなわち、神は一方で自然の諸事象に対し、それらが数学的な法則に従って運動を続けるものと定める。このことを言い直すならば、自然は数学にもとづいた物理的法則によって変転を続けるとの規定を神が定める。他方で神は人間の精神にも数学を解する能力をあらかじめ与えておく。この結果、人間は自らの持つ数学に対する理解の可能性を持って外的自然の認識および自然探究を行うことができる。要するに、自然は数学的な法則によって動き、人間は自らが有する数学の理解力を用いてそのことを確認できることになる。そして自然事象と人間との数学による通約の可能性をもとに、人間は自然を数学的に理解しうることとなり、実験などを通じた自然探究を行うことが保証されるのである。このことから、物理的物体である身体もまた機械論的に理解される可能性が拓かれ、デカルトの心身関係論が神の存在に裏打ちされつつ展開することが基礎づけられるのである。

さて、デカルトの形而上学をいわば貫いて神は存在しており、その論拠は彼の著作である『世界論 *le monde*』および『方法序説 *Discourse de la*

méthode』においてもその伏在を確認することができる^{注20)}。そして心身の在り方を論ずることの前提に神が存することの論拠については、彼の『哲学原理 *Principia philosophiae*』における次の記述を参照することができるだろう。

そして、たとえ神が、あるそうした思惟する実体にある物体的実体を、それ以上は不可能であるほど緊密に接合し、そしてその二つの実体からある一つのもの *unum quid* をつくりあげたと仮定しても、それにもかかわらず、それらは依然として実在的に区別されている *realiter distinctae* のである。なぜなら、神がそれらをいかに緊密に合一したとしても、以前にそれらを分離するために、すなわち一方を他方なしに保存 *conservo* するためにもっていた力 *potentia* を神が失うことはありえなかったし、神によって分離され、別々に保存されるものは、実在的に区別されたものであるからである^{注21)}。

ここで引用した箇所は、デカルトの心身関係論が神と絡めて論じられたものである。それによれば、異なる実体としての心身が密に結合したとしても、それでもやはり神の力によって別々に引き離されることも可能であるとデカルトは述べている。すなわち、人間の心身関係における神の関与が決定的にうかがわれるのであり、心身の区別および本研究の後段で述べる心身の合一 *l'union de l'âme et du corps* が論じられるのならば、デカルトによる当該見解の根底には神の存在が求められる。要するに、晩年の書簡に至るまで確認できるこの「創造説」は^{注22)}、デカルトにおける自然哲学および心身関係論を語る上で必要なものであり、神の存在を踏まえることなくしては、彼の心身論は語るができないと言える^{注23)}。体育の心身関係論においてデカルトが批判される場合、以上に瞥見した彼の学説の思想的な基礎は果たして十分に検討されてきたであろうか。

さて、人間が自らの有する諸感覚にもとづいて

判断を下すことにおいても、ひとたびその判断に哲学的な吟味を与えるならば、その妥当性は疑わしいものといえる。というのも、すでにデカルトは『省察』において、感覚にもとづく各々の判断が事物の真理性を保証しないことについて、以下のように述べるからである。

いま私は、たしかに目覚めた目で *vigilantibus oculis* この紙を見ている。私が動かしているこの頭は眠っていない。この手を故意に、意識して伸ばし、感覚 *sentio* している。これほど判明なことは眠っている人には起こらないだろう。だがそれは、私が別のときに、眠りのなかで、やはり同じような考えによってだまされたことがないと言っても言わんばかりである。このことを注意深く考えてみるに、目覚めと眠りとを区別することができる確かな標識がまったくないことを私は明確に見てとって驚く *tam plane video nunquam certis indiciis vigiliam a somno posse distinguere* あまり、この驚き自体が、私は眠っているのかもしれないという意見をほとんど私に確信させるほどである^{注24)}。

デカルトは現実と夢とを明確に区別する指標について検討を加える。すなわち、現実であれ夢のなかであれ、頭ない手足を動かすことを認識することができる。そしてそれらの認識が現実であれ夢の中であれ、自らの体験している内容であると確信することは可能である。しかし、現実と夢との区別を明らかにすることが不可能であれば、自らの感覚にもとづく判断を疑いないものと断ずることも困難であろう。なぜなら、夢のなかで行った事どもは目覚めている時に行っているものではない——つまり、実際に行われているのではない——にもかかわらず、実際に当の行為を行っていると各々が判断する誤謬の可能性が残されるからである。

デカルト研究者が指摘するように、感覚を通して知ったと思われることを「感覚的意見」とするならば、それらに基づいて「世界は私の感じ

たとおりになっている」とする立場が感覚を信頼する立場である^{注25)}。あるいは、外的な世界が感じられた通りに実在すると見なす立場が感覚を信頼する立場といえる^{注26)}。しかし、たとえば見間違いや聞き間違いなどのように、感覚にもとづいた判断には誤りの可能性が含まれる。そして、夢のなかでも現実と同じように感覚するのであれば、諸感覚に基づく判断に間違いなど生じないと主張することは困難である。

このように、夢のなかにおいても人間には諸感覚が働くならば、自らの感覚を信じることから下される判断は、必ずしも対象の真理性を確証し得ないことになる。そしてこのことを体育哲学（原理）の議論に即して考えるならば、自らの有する諸感覚に判断の妥当性の基盤を置く諸々の主張は、その説得力を失うことになるであろう。

これらに加えて、これまでの諸研究者に見られたように、デカルトがいわゆる心身の実在的な区別を述べる箇所を根拠とし、当該の記述のみに着目してデカルトを心身二元論の哲学者と断ずることも早計であろう。なぜなら、彼は心身の実在的な区別が主張される「第六省察」において、次のようにも言及しているからである。

また自然 *natura* は、これらの苦痛や飢えや渇きなどの感覚によって、私は水夫が舟に乗っているような具合に、私の身体にただ乗っているだけではなく、身体ときわめて緊密に結ばれ、いわば混合されており、したがって身体とある一なるもの *unum quid* を構成している、ということをも教えている。なぜなら、さもなければ身体が傷ついていても、考えるものに他ならない私は、そのために痛みを感覚することはないであろうし、ちょうど水夫が、舟のどこかがこわれているときに視覚でそれを覚知するように、私はその傷を純粹知性で認識する [だけ] であろうからである。また身体が飲食物を必要としているときでも、私はそのこと自体を知性で明瞭に理解しても、飢えや渇きの不分明な感覚をもつことはないからである。と

いうのも、たしかに飢え、渇き、痛みなどの感覚は、精神と身体とが合一し、いわば混合 *permixtio* していることから生じる、ある不分明な意識様態 *quidam cogitandi modi* にほかならないからである^{注27)}。

デカルトは飢えや渇き、あるいは痛みといった身体の内部に直接感じられることごとについて、それらを心身二元論とは異質の立場から論じている。言い方を変えるならば、デカルトが人間における感覚の有り様について論じる際、精神と身体という心身二元的な議論は行っていない。なるほど、いわゆる方法的な疑いの遂行——「第一省察」以来のいわゆる〈方法的懷疑〉——によって感覚にもとづいた判断の妥当性は疑われる。しかし『省察』の議論を辿れば明かなように、「第三省察」末尾において神の誠実性が保証され^{注28)}、その後の「第六省察」においては誠実な神の存在が保証されるがゆえに人間は自らの諸感覚をも信頼に足るものとしてこれを位置づけることができる。端的に言えば、神の存在を前提としてデカルトは心身論を展開し、感覚にもとづく知見を信頼することの根拠をも得るのである。

以上のデカルトに対する検討をふまえるならば、次のことが言えるであろう。体育原理において心身論を議論してきた研究者たちのうちの多くは、デカルトの心身論を二元論として捉えたうえ、その思想をいわば局所的に批判してきた。しかしながらデカルトの心身論は、それを存立させる存在としての神が不可欠であり、彼の心身論においては神の存在を前提とすることが求められる。また感覚にもとづく事物の判断についても、それは一端方法的な疑いによって吟味されたのち、誠実な神の存在の裏づけをへて信頼に足るものとなる。他方でこれまで体育原理分野の心身論においては、デカルトにおける神の存在についての議論および感覚にもとづく判断の妥当性の吟味について深く検討されてこなかったといえる。その結果、これまでの体育原理の研究史に見られたように、

諸論者による論理的な誤謬に加え、デカルトの思想を体系的な観点から検討する視点が欠如していた。このことを逆から言うならば、デカルトの思想を体系的な見地から検討するという方法的な前提を有することで、デカルトに対する充足的な批判もなしえるものと言えよう。

さて、それではデカルトの心身論が体育哲学においても語られうとするならば、具体的にはどのような論じ方が可能であろうか。この問いに対して以下に簡略な検討を行いたい。というのも、デカルトの心身論を彼の哲学体系という観点から考察することにより、体育の心身論におけるデカルト哲学の語り方についても、新たな展開が見られるからである。

IV. 「心身の合一」の視界から

とりわけ『省察』の公刊以後において、デカルトはいわゆる日常的な経験世界における人間の心身を密接に結合したものとして考える。すなわち、心身が実体としてのあり方を保ちつつ、双方が直接的な因果関係を結ぶことによって人間の生が営まれるものとデカルトは見なしている。たとえば彼は或る書簡において次のように述べる。

精神はたしかに身体に対して強い力を持っています。たとえば、怒りや恐怖やその他の情念が身体に大きな変化を引き起こすことがそれを示しています。しかし精神は、直接その意志によって精気を有益あるいは有害であり得る場所へ運ぶのではなく、それはただ精神がある他のものを意志したり考えたりすることによるのです。というのは、われわれの身体づくりは、あることを考えると自然に身体がある動きをするようになっている *la construction de notre corps est telle, que certains mouvements suivent en lui naturellement de certaines pensées* からです。たとえば、羞恥心から顔が赤くなり、同情から涙が出、喜びから笑うことがあるように^{注29)}。

この言及は、書簡の宛て先となるエリザベト王女の疾病に対する予防策として、節食 *la diete* や運動 *l'exercice* の効能を説く文脈において確認できる。デカルトによれば、物質ではない精神が物質としての身体へ因果的に作用することにより、身体に様々な様子の現れるさまが述べられている。あるいは彼の最晩年の著作である『情念論 *Les Passions de l'âme*』においてもまた、人間が有する自由意志について論じる文脈において、次の記述を確認できる。

意志も二種類ある。第一は、精神そのもののうちに終結する精神の能動だ。たとえば、わたしたちが神を愛そうとする場合、あるいは一般に物質的でない何らかの対象に思考を向けようとする場合。第二は、身体において終結する能動 *des actions qui se terminent en notre corps* で、たとえば、散歩する意志を持つことだけで脚が動き歩行がなされる *nous avons la volonté de nous promener, il suit que nos jambes se remuent & que nous marchons* 場合^{注30)}。

この箇所は人間が有する生理的な諸機能について、心身の関係する有り様を交えて述べられたものである。この記述によれば、意志には二つの種類が認められ、そのうちの一方は神などの非物質的な諸対象を考察する場合に働くものであり、他方ではいわゆる心的因果性——精神と身体との直接的な因果関係——において働く意志である。すなわち、各々が歩行する意志を有することにより、心身の直接的な因果に拠って足が動くものとされる。この記述からうかがえるように、デカルトは人間がそのうちで生きる日常経験の世界において、心身の相関が直接的に知られるものとされる^{注31)}。すなわち、彼によれば心身の因果関係は「日々のきわめて確かで明証的な経験によって示される *certissima & evidentissima experientia quotidie nobis ostendit*」であり、「それ自身によって知られ、(…) ほかのことによって説明しよ

うとすると曖昧になる事柄の一つ *una est ex rebus per se notis, quas, cum volumus per alias explicare, obscuramus*」とされる^{注32)}。端的に言えば、デカルトは心身の実体としての位置づけを確保しつつ、それらが直接的かつ因果的に関係しあうものとして人間の心身を見なしていたといえる。そのことは、「精神は真に身体全体に結合している *l'ame est veritablement jointe à tout le corps*」といった彼の『情念論』における心身観、および「習性 *habitude*」といった心身の直接的な因果関係を前提とする仕組みを認める彼の言及からも明らかであって^{注33)}、体育の原理論においては、デカルトが自らの最晩年において積極的に打ち出した心身観についてほとんど検討されてこなかったと言える。このことはまた、彼の心身観について体系的な視点から考察が加えられて来なかったことを意味するとも言えよう。なぜなら、『省察』以後のデカルトは人間を常に心身の実体的に合一した存在と見なしており、往昔の体育原理において行われたデカルト批判とは異質の立場が彼の『情念論』をはじめとした諸テキストにおいて明瞭に確認できるからである^{注34)}。

以上のデカルトの心身観を考察してみると、少なくとも次のことが言えるであろう。すなわち、いわゆる日常経験のなかの人間のあり方を論じる体育哲学（原理）の議論においては、デカルトが『情念論』において詳しく論じた心身観をむしろ重点的に検討しなければならなかったのではないだろうか。別の言い方をすれば、単に心身二元論という言葉のもとにデカルトの心身観を批判するのではなく、彼の思想を体系的な見地から捉え、心身の合一した存在としての人間観——デカルトが『情念論』において論じた心身観および人間観——に検討を加えることが体育原理の諸研究者には求められていたのである。したがって、今後の体育の原理論においてデカルトの心身関係論を検討するならば、つねに『情念論』において展開された心身観およびそれを対象とした批判的考察が必要であろう。なぜなら、この著作において述べ

られた心身観およびそれにもとづく人間観は、体育の場における人間の有り様——すなわち、日常経験の世界における人間の有り様——を如実にあらわすものといえるからである。

V. お わ り に

本論における考察の結果、次のことが明らかとなった。まず、これまでデカルトに対する批判を繰り返してきた諸論者のうちの多くは、デカルトの心身論を断片的に取り上げて批判を行ってきた。しかしながら、デカルトの心身論とは「創造説」を起点とする形而上学のなかに位置付けられるものであり、神の存在なくしては語りえないものである。また、自らの有する諸感覚にもとづいた判断の妥当性は、デカルトの「第一省察」の議論によって反駁されうるのである。他方、彼は心身の実体としての区別が述べられる「第六省察」以後において人間を心身の合一した存在として捉えており、体育原理の研究者はこの心身の合一した存在としての人間観に対して検討を行う必要があった。そしてその心身観は『情念論』においてははっきりと打ち出されており、体育の原理論においては当該の心身観およびそれにもとづくデカルトの議論に対して考察を及ぼさねばならない。以上をふまえた結論的な知見を言えば、デカルトの心身関係論は彼の哲学を体系的な見地から捉えて考察することが必要であり、そのことによって初めて彼の心身論に係る思想に対しても適切な批判がなしうるのである^{注35)}。そしてこの結論的な知見をふまえることによって、任意の哲学者の思想——それはもちろんデカルトに限られるものではない——を断片的にではなく、いわば全体論的な視点から検討する視座が提案できる。別の言い方をすれば、或る哲学者の思想を体系的な視点から捉えることによって研究対象についてのより適切な批判もなしうるのであって、このことは体育の原理論的な考察においても同断なのである。

なお、向後の課題としては、『情念論』においてデカルトが表明した心身観に対する検討がまず考えられる。またこの著作において現れる「習性 *habitude*」や「予備修練 *préméditation*」は当該の心身観を前提として述べられており、これらの概念に含まれる教育的含意についても考察できよう。さらに、もしデカルトの心身関係論が体育における心身論の基礎として据えられるのならば、その基礎づけに相当するものへの検討もなされなければならない。すなわち、デカルトの心身論は本論でも述べたように神の存在を前提として語られるものであって、今後の体育哲学研究においては、体育（哲）学における神学的基盤の検討も諸研究者に課せられた課題の一つとなろう。

注

- 注 1) 樋口聡『身体教育の思想』勁草書房、2005年、136頁において記されているように、身体教育という言い方が直ちに従来の「体育」を意味するものでないことには留意しておきたい。本研究では当該の指摘をふまえつつ、いわば伝統的に用いられてきた「身体教育＝体育」という図式を採用することによって議論を進める。なお「体育原理」分野は2005年度より「体育哲学」分野に名称変更した。本研究では主に「体育原理」の名称を用いていた時期の議論を中心に検討したため、「体育原理」と「体育哲学」の名称を意味内容の区別なく併用する。
- 注 2) 佐藤臣彦『身体教育を哲学する——体育哲学叙説——』北樹出版、2003年、188-193頁参考。
- 注 3) たとえば木庭康樹「プラトン哲学におけるソーマの原理的特性」『体育学研究』第48巻第5号、2003年、555-572頁、また林 洋輔『体育哲学におけるデカルト心身論の原理論的考究：従来のデカルト心身論批判の再検討を通して』、同第56巻第2号、2011年、271-286頁、あるいは佐々木 究『「physique」と教育：ルソー著『エミール』に着目して』同第57巻第2号、2012年、399-414頁などを挙げることができる。
- 注 4) デカルトからの引用は、Adam, C. and Tannery, P. (Eds.) (1996) “Œuvres de Descartes” (11vols.) に拠り、ATの略記号のあとにローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を表示する。また邦訳については『情念論』谷川多佳子訳、岩波書店〈岩波文庫〉、2008年、『哲学原理』山田弘明他訳、筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、

2009年、『省察』山田弘明訳、筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、2008年、『デカルト全書簡集（第一巻）』山田弘明他訳、知泉書館、2012年、『デカルト＝エリザベト往復書簡』山田弘明訳、講談社〈学術文庫〉、2001年をそれぞれ採用した。

注5) 高島平三郎『體育原理』育英舎、1904年、55頁。なお、原文中の旧字体については、引用者によって現代語仮名遣いに改めた。

注6) 同上、92頁。

注7) 飯塚晶山 可兒徳 吉原藤助 赤間雅彦 杉本正信『體育原理』日本體育会、1930年、20頁。

注8) 同上、21頁。具体的には次の文脈において〈心身二元論〉を退ける主張を確認できる。「二元論によって説明し得ない事実は幾多あるが、就中心身相関の事実はどうしても説明することが出来ぬ。二元論の言う如く、精神と身体とは全く別種のものであって、精神は統一せる非物質的のもの、身体は雑駁なる物質的のものとしたならば、如何にして全く本質を異にせるこれら両者の間に、互に密接なる影響を及ぼし得るであろうか。又非物質的・不変的な精神が、如何にして物質的・変化的な身体と合一し得るか。これらの問題は、悉く皆二元論にとっては了解することが出来ぬのである」。なお引用における旧字体の表記については、引用者によって現代語仮名遣いに改めた。

注9) 同上、29頁。

注10) 戦前期の自然科学者である橋田邦彦は主に生理学の立場から、生体の仕組みを「全機性」という視点によって検討している。『生体の全機性：橋田邦彦選集』共同医書出版社、1977年、121頁において、橋田は「心身一如」という立場から心身関係のありさまについて主張しており、当該の議論はデカルトの心身観とは異なるものといえる。

注11) 松井三雄 吉田清 平野平三 浜田靖一 木下秀明『大学体育 講義要綱』広文社、1960年、8頁。

注12) 同上、8頁。

注13) 同上、8頁。

注14) 川村英男『体育原理』（改訂第3版）杏林書院：体育の科学社、1978年、84頁。

注15) 下津屋俊夫『現代哲学的体育学：「附」体育教材及び指導法』大学館書房、1970年、244頁。

注16) 佐藤、上掲書、188頁以下参考。ただし、佐藤による批判については以下のことについて留意しておきたい。彼は体育原理の諸研究者によって主張されてきた〈心身一如〉の心身観を退ける論拠として、臨濟宗の栄西による言及を指摘する。そして「心身二元が常態であることを前提としているからこそ、修行によって到達されなければならない目標として、心身一如が設定

されることになるのである」と指摘する。彼の指摘は議論として首肯されるべきであるものの、この言及に対しては以下の点について検討する余地がある。第一に、仮に栄西が〈心身二元〉を唱えたにせよ、それはデカルト的な意味における〈心身二元（論）〉とは異質のものである。なぜなら、いわゆる西洋哲学の文脈においてデカルトが論じた心身観と、栄西が唱える心身観は異なった思想的出自を有すると思われるからである。それゆえ栄西における心身の二元的理解の内実については、さらに検討できるだろう。また栄西における〈心身一如〉のうちの〈心〉および〈身〉の意味内容についても、デカルトの考えるそれとは異なるであろう。というのも、たとえば栄西が論じた〈身〉とは、デカルト的な意味での機械論的な身体ではないと考えられるからである。事情は〈心〉の概念についても同様のことであって、デカルトと栄西とは〈心〉ないし〈身〉という諸概念によって意味される内容は明らかに異なると見るべきである。以上のことを要約的に言えば、なるほど佐藤の議論は心身論批判としては正鵠を得ているものの、栄西が前提にしたとされる心身二元の内実および心身おのおのの意味内容については、向後議論されるべきであろう。栄西の心身観を考察することによって、体育の心身論における新たな議論の地平が拓かれると考えられるからである。

注17) デカルトが以下に述べる「創造説」を明言する以前の1628年に彼はオランダに移住し、この時点で彼は神の存在に対する深い問題意識を抱いていたことが考証学的に確認されている。すなわち、デカルトの「創造説」とは1630年4月15日の書簡を以て突然に表明されるというよりは、既にデカルトの胸中にあったものが書簡において明確に表明されたものと考えることが解釈として適切であるように思われる。なおデカルトがオランダに移住する以前にも神を語ることに対する問題意識を抱いていたことについては、Geneviève Rodis-Lewis “Descartes' life and the development of his philosophy,” in *The Cambridge Companion To Descartes*, John Cottingham (ed.), Cambridge : Cambridge University Press, 2005, p. 35を参考。

注18) AT I, 145.

注19) 山田弘明『デカルト哲学の根本問題』知泉書館、2009年、30頁以下参考。彼が指摘するように、真理とされる諸命題は神によって決定されたこと、真理の真理性たる根拠は神に求められること等がデカルトの唱えた「創造説」の核心に存する。

注20) 『世界論』第七講（AT XI, 47）および『方法序

説』第5部（AT VI, 41）において、神が主意的に外的自然の機械論的なあり方を規定したとの議論を確認できる。人間の身体もまた物質であることから、身体の存立根拠としての神の存在をうかがうことができる。

注21) AT VIII-I, 29.

注22) デカルトが没する前年である1649年2月5日付けモア宛書簡（AT V, 272）において、神が実際には存在しない空虚やそれ以上分割不可能なものとしてのアトム atomus を創造することもできたとされるのと言及を確認できる。そして、デカルトによる当該言及は全能の神における主意性を述べたものと解釈することができる。すなわち、1630年に主張された「創造説」が継続されていると見なすことができよう。

注23) デカルトがなぜ「創造説」を表明したのかという問いについては、研究者のあいだでも議論がある。この点に関し松浦一郎『近世哲学思想研究—デカルト—』学文社、1988年、218頁では、物心二元論の構築がアリストテレス的な自然観を打ち破るための戦略的な策定とする指摘がなされている。もしこの解釈を採るならば、二元論の思想的な端緒にあるはずの「創造説」もまた、その背景にはデカルトによる戦略的な意図があったとする解釈ができよう。ただし、デカルトによる確たる言質が採取不能であるため、この問題についての立ち入った議論は差し控えることとしたい。

注24) AT VII, 19.

注25) 村上勝三『新デカルト的省察』知泉書館、2006年、25頁。ここで言われる「感覚的意見」とは、「理由が問われて、聞いたから、見たからと答える。そのように知ったと思ったときの知られたと思われたこと」、すなわち「感覚を通して知ったと思われていること」と定義されている。本研究もこの定義にしたがう。

注26) 同上、25頁。

注27) AT VII, 81.

注28) ここでは「第三省察」第38段落（AT VII, 51）の議論を指す。

注29) AT V, 65.

注30) AT XI, 342-343.

注31) デカルトのこの言及については、1643年5月21日付けエリザベト宛て書簡（AT III, 665）および1643年6月28日付同宛て書簡（AT III, 691-692）を参照。

注32) AT V, 222. なおこのデカルトの書簡の邦訳については、小林道夫『科学の世界と心の哲学：心は科学で解明できるか』中央公論新社〈中公文庫〉、2009年、103頁の訳出に拠った。

注33) AT XI, 351. なお「習性 *habitude*」についてのデカルトの言及は『情念論』第一部第50項（AT

XI, 368-371）など諸箇所において確認できる。体育哲学におけるこの「習性」の意義については、林洋輔「体育哲学における身体 *corp* の二面性：デカルトにおける「人間」理解に着目して」『身体運動文化研究』第17巻第1号、2012年、43-65頁において若干の検討が行われているほか、今後の体育哲学における重点的な検討課題となろう。というのも、この「習性」は主体における後天的な認識の変化を論じるものであり、教育論的な考察が可能であると思われるからである。

注34) デカルトが述べる心身の合一した存在としての人間理解について、それは体育原理の研究者たちによって既に指摘されてきたことであるとの批判も予想できる。たとえば、浅井浅一『体育の哲学』（第三版）黎明書房、1964年、73-74頁においては、「心身は一体として不可分」であるの言及も確認することができる。ただし、彼はデカルトのように心身を実体としてみなす立場を明確に退けており、デカルトにおける神に対しても検討を及ぼしてはいない。この論点において、浅井の主張する心身観はデカルトのそれとは大きく異なるものといえるだろう。

注35) なおこの結論的知見については、小林道夫『デカルト哲学の体系 自然学・形而上学・道徳論』勁草書房、1995年、66頁におけるテキスト読解の指針についての彼の指摘に多くの示唆を得た。

参考文献

- Adam, C., Tannery, P., (Eds.) Œuvres de Descartes (11vols.), Vrin, Paris, 1996.
- 浅井浅一：体育の哲学（第三版），黎明書房，東京，73-74, 1964.
- デカルト，ルネ：山田弘明訳，デカルト＝エリザベト 往復書簡，講談社，東京，55, 2001.
- デカルト，ルネ：谷川多佳子訳，情念論，岩波書店，東京，20f, 2008.
- デカルト，ルネ：山田弘明訳，省察，筑摩書房，東京，121f, 2008.
- デカルト，ルネ：山田弘明他訳，哲学原理，筑摩書房，233, 2009.
- デカルト，ルネ：山田弘明他訳，デカルト全書簡集（第一巻），知泉書館，135, 2012.
- 林洋輔：体育哲学におけるデカルト心身論の原理論的考究：従来のデカルト心身論批判の再検討を通して，体育学研究 56 (2), 271-286, 2011.
- 林洋輔：体育哲学における身体 *corp* の二面性：デカルトにおける「人間」理解に着目して，身体運動文化研究 17 (1), 43-65, 2012.
- 橋田邦彦：生体の全機性 橋田邦彦選集，東京大学医学

- 部生理学同窓会編，共同医書出版社，東京，121，1977.
- 樋口聡：身体教育の思想，勁草書房，東京，136，2005.
- 飯塚晶山 可兒徳 吉原藤助 赤間雅彦 杉本正信：體育原理，日本體育会，東京，20，1930.
- 川村英男：體育原理（改訂第3版），杏林書院：體育の科学社，東京，84，1978.
- 木庭康樹：プラトン哲学におけるソーマの原理的特性，體育学研究 48（5），555-572，2003.
- 小林道夫：デカルト哲学の体系 自然学・形而上学・道德論，勁草書房，東京，66，1995.
- 小林道夫：科学の世界と心の哲学：心は科学で解明できるか，中央公論新社，東京，103，2009.
- 松井三雄 吉田清 平野平三 浜田靖一 木下秀明：大学体育 講義要綱，広文社，東京，8，1960.
- 松浦一郎：近世哲学思想研究—デカルト—，学文社，東京，218，1988.
- 村上勝三：新デカルト的省察，知泉書館，東京，25，2006.
- Rodis=Lewis, G  n  vieve. "Descartes' life and the development of his philosophy", The Cambridge Companion To Descartes. Ed. John Cottingham. Cambridge : Cambridge University Press, 21-57, 2005.
- 佐々木究：「physique」と教育：ルソー著『エミール』に着目して，體育学研究 57（2），399-414，2012.
- 佐藤臣彦：身体教育を哲学する—体育哲学叙説—，北樹出版，東京，188-193，2003.
- 下津屋俊夫：現代哲学的体育学：「附」体育教材及び指導法，大学館書房，東京，244，1970.
- 高島平三郎：體育原理，育英舎，東京，55，1904.
- 山田弘明：デカルト哲学の根本問題，知泉書館，東京，30，2009.